

令和 2 年 4 月 22 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K01893

研究課題名(和文)「1945年前後」「1949年前後」の台湾映画統制に関する基礎研究

研究課題名(英文)Basic research on film control in Taiwan around 1945 and 1949

研究代表者

三澤 真美恵(MISAWA, Mamie)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：90386706

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：台湾の場合、1945年前後で統治国家が異なり、1949年前後で実効統治地域が異なる。このため1945年と1949年という二つの政治的画期を貫く研究は少ない。本研究では、断代史的な記述では盲点になりがちな二つの政治的画期を跨ぐ台湾における映画統制の連続面と不連続面を、近年発見されたフィルム資料を活用しながら、戦争動員のための国民統合という一貫した視角を通じて明らかにすることを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、戦争動員のための国民統合という一貫した視角を通じて台湾における映画統制を考察することで、断代史的記述では盲点になりやすい1945年と1949年という二つの政治的画期を貫く文脈を示したことにあ  
る。また、その一部をなす植民地期のプロパガンダ・フィルムに関する研究では、メタ・データに乏しいフィルム資料に関して異なるディシプリンによる具体的な研究モデルを示し、今後の国際的な比較研究への可能性を開いた。

研究成果の概要(英文)：In the case of Taiwan, the governing state was different before and after 1945, and the effective governing area was also different before and after 1949. For this reason, few studies have gone through the two political epochs of 1945 and 1949. This study has attempted to clarify the continuity and discontinuity of film control in Taiwan, which straddles the two political epochs that tend to be blind spots in previous historical accounts, through a coherent perspective of national integration for war mobilization, with using newly discovered audiovisual materials.

研究分野：地域研究

キーワード：台湾 映画統制 国民統合

### 1. 研究開始当初の背景

台湾研究の場合、映画史に限らず「1945年」をまたぐ「日本の植民地期」と「中華民国による接收後」は統治国家が異なるために別個に成果が蓄積される傾向があり、「1949年」をまたぐ中華民国政府の「中国大陸時期」と「台湾への撤退後」もまた実効統治地域が異なるために別個に成果が蓄積される傾向がある。このため「1945年前後」と「1949年前後」という二つの政治的画期を貫く研究は少ない。

他方、資料状況は大きく変化した。本研究にとって特に重要なのは、1945年の接收直後からニュース映画を製作した「台湾省電影撮製場」を含む「台湾省級機関档案」や、「台湾省行政長官公署档案」「台湾省政府委員會議案」などが2012年に公開されたことである。同時に、1999年921地震によって営業を停止した「台影公司」（「台湾省政府新聞処電影製片廠」の後身）が自社の膨大なフィルム史料を国家電影資料館に移管した結果、同社が1945年から製作されてきた貴重なニュース映像の一部が、デジタル修復され閲覧可能になった。また、2003年には現存しないと思われていた植民地期・接收後初期のものを含めた映画フィルム168巻および映画検閲脚本138件が民間に私蔵されていたことが判明し、2005年国立台湾歴史博物館（National Museum of Taiwan History、以下「台史博」と略記）がこれらを購入収蔵することになった（その後2007年にあらためて収蔵されたものを含め2016年現在で175巻。内訳は35ミリ152巻、16ミリ23巻）。これらの史料も委託を受けた国立台南芸術大学による修復を経て、台史博ウェブサイト内「片格轉動的台灣顯現」（<http://digimuse.nmth.gov.tw/Jplan/>）でデータが公開された。

以上の資料状況の変化によって、文字資料と映像資料の両面から「1945年前後」「1949年前後」の映画統制史を実証的に調査することが可能な環境が整いつつあった。

### 2. 研究の目的

「戦後」台湾映画史は、日本の植民地統治を受けた社会と、日本の軍事侵略を受けた中国国民党政権が出会ったところに生起しており、一国史的な枠組みではとらえきれない（【表1】参照）。

植民地統治と日中戦争（1945年以前）から、外来政権統治と国共内戦・東西冷戦（1945年以後、1949年前後）へという大きな変化のなかで、各時期の映画統制はどのように展開したのか。新たに公開された文字資料と映像資料の双方を用い、これまでの断代史的な記述では盲点になりがちだった「1945年前後」「1949年前後」の台湾における映画統制の連続面と不連続面を、異なる二つの国家による「戦争動員」のための「国民統合」という一貫した視角を通じて明らかにすることが、本研究の目的である。

【表1：本研究で扱う時期・地域と映画統制の行政主体】

	台湾	中国大陸
1937～1945年	①日本（台湾総督府）	②中華民国（国民党政権中央）
1945～1947年	③中華民国（行政長官公署）	④中華民国（国民党政権中央）
1947～1949年	⑤中華民国（省政府）	⑥中華民国（国民党政権中央）
1949～1953年	⑦中華民国（省政府／国民党政権中央）	

### 3. 研究の方法

政治的画期、地理的境界を跨いだ連続面と不連続面を明らかにするため、二つの異なる国家による映画統制を、「戦争動員」のために異民族（異族群）を包摂する「国民統合」という一貫した視角を通じて考察する。その際、統制の内容と対象を明確にしながらか論じるために、【表2】に示す分析枠組を用いる。

この分析枠組を用いるのは、統制の具体的な内容を消極的統制（検閲・取締）と積極的統制（宣伝・指導）に分けて考察し、統制の対象についても国民として統合すべき「我々」とそうした統合から排除する「彼ら」とに腑分けして考察するためである。ただし、実際の運用においては、消極的統制と積極的統制は表裏一体だったことに留意する必要がある。また、研究の主たる対象地域は台湾であり、中国大陸（【表1】の右側に相当）についてはあくまでも台湾を考察するための参考とする。

なお、本研究では当初マルチ・アーカイブ方式をとる計画であったが、2017年の病氣療養を経て各地での調査を十全には実施できない状況に陥ったため、予定していた国外での調査の一部は断念せざるを得なかった。この不足を補うため、人物研究や作品分析の手法を取り入れ、それまでに実施していたアーカイブ資料に加えて、新たに刊行された復刻資料やDVD資料などを用いて研究を進めた。

また、時期的には台湾で国民党政権の基盤が相対的に安定する1953年を下限とするのが当初

案であったが、マルチ・アーカイブ方式が十全に実施できないことによる不足を補うもうひとつの工夫として、「1945 年前後」「1949 年前後」の特徴がより明確になることを期待し、「戒厳令解除の前後」という画期についても、新たに視野に入れることとした。

【表 2：映画統制の分析枠組】

		統制の対象	
		〈我々〉	〈彼ら〉
統制の内容	消極的統制: 検閲・取締	〈我々〉に対する「負の要素」を 取り締まる	〈彼ら〉からの・への「負の要素」を 取り締まる
	積極的統制: 宣伝・指導	〈我々〉に対する「正の要素」を 広める	〈彼ら〉からの・への「正の要素」を 広める

#### 4. 研究成果

本研究の主な成果は以下の 4 点である。

(1) 研究対象のうち【表 1】①1937～1945 年台湾（日本植民地統治期、台湾総督府）の映画統制に関しては、本研究を含む三つの科研費課題（課題番号 20652050、23510328、15K01893）の成果の一部として、国立台湾歴史博物館の協力により日本には所蔵のない記録映画、劇映画、アニメ映画を含む DVD を付した論集『植民地期台湾の映画——発見されたプロパガンダ・フィルムの研究』（三澤真美恵編、東京大学出版会、2017 年 8 月）を刊行した。この論集は、本報告書「1. 研究開始当初の背景」に記した 21 世紀に入って新たに発見された資料を扱っている。発見されたフィルムの多くは一般的な映画研究が扱う映画作品とは異なり、いつ、どこで、誰が撮影したかというメタ・データが乏しかった。過去の科研費課題（上記）で実施した基礎的な調査の結果（HP「三澤研究室」<http://misawa.pbworks.com/>で公開）を引き継ぎ、2016 年のワークショップ「植民地期台湾映画フィルムの研究—アニメーション史や音楽学の視点で考える」での中間的な成果公開を経て、論文集では異なる領域（台湾史、日本史、音楽学、フィルム・アーカイブズ学など）の 8 人による研究論文を収めたことで、メタ・データに乏しいフィルム資料に関する具体的な研究モデルを示し、今後の国際的な比較研究への可能性を開いたといえる。これは本研究課題における「1945 年前後」の「前」の部分についての成果公開であり、「1945 年後」および「1949 年前後」との連続面と不連続面を問う際の土台となっている。また、上記の研究をふまえ、植民地期台湾映画史研究に関する方法論的な整理を行ったのが、「初期臺灣電影史研究的方法與課題」、李道明主編『動態影像的足跡——早期臺灣與東亞電影史』（国立台北藝術大學・遠流出版、2019 年 3 月、pp. 27-56）である。

(2) 研究対象のうち【表 1】②1937～1945 年中国大陸（中華民国、国民党政権中央）、③1945～1947 年台湾（中華民国、行政長官公署）、④1945～1947 年中国大陸（中華民国、国民党政権中央）、⑤1947～1949 年台湾（中華民国、省政府）、⑥1947～1949 年中国大陸（中華民国、国民党政権中央）、⑦1949～1953 年台湾（中華民国政府の台湾への移転後、省政府／国民党政権中央）の映画統制については、戦争動員のための国民統合という視角から「国歌フィルム」に着目した。「国歌フィルム」は戒厳令解除後も 1990 年代半ばまで台湾のあらゆる映画館で必ず本編の前に上映され、すべての観客が起立を求められた。当時を知る台湾人にとっては本編鑑賞前のお馴染みの儀式（身体規律の場）だったといつてよい。本研究では、当時「当たり前」だった光景が、いつ、どのように始まり、どのような消極的統制（検閲・取締）を伴いながら、積極的統制（宣伝・指導）としてどのように受容され、どのような議論を経て上映が停止したのかを明らかにした。その過程で、国史館（台湾）に保管されていた蒋介石が起草した国歌草稿を発見し（このうち 1947 年版には異なる作曲者による楽譜 8 部も付されていた）、蒋介石が抗戦時期から台湾撤退後まで一貫して、国歌に国民統合の効果を期待していたことも確認できた。このことは、消極的統制が困難となっていた 1937～1945 年の中国大陸（【表 1】②）において中華民国・国民党政権中央による積極的統制の一環として製作された数少ない映画のなかに「国歌」が含まれていたこととも符号する。また、映画製作以前の「国歌フィルムの濫觴」とみなされるスライドとレコードを用いた「国歌」普及の試みにおいて、1930 年代の中国大陸で使用されたスライドの視覚的シンボル（国旗、孫文、蒋介石）は、1949 年以後の台湾（【表 1】⑦）で製作された「国歌フィルム」においても新たな要素（大陸を含む「秋海棠」形の中華民国地図など）を加えながら踏襲されていたことは、現存するフィルム資料の調査によっても確認できた。以上の内容は、「戦後台湾の映画館における国歌フィルム上映プログラムの確立」（『日本台湾学会報』18 号、2016 年、63-85 頁）で公刊した。

(3) 上記の研究成果をふまえ、日本植民地統治期の台湾総督府と接收後の中華民国（行政庁官公署省／省政府／国民党政権中央）という二つの異なる国家による映画統制について、「戦争動員」のための「国民統合」という一貫した視角を通じて考察した試みが、植民地期の皇民化運動におけるプロパガンダ・フィルムの利用（上記の（1）の成果の一部）と、「反共抗ソ総動員運動」のなかで確立された「国歌フィルム」上映プログラム（上記の（2）の成果の一部）とを、【表2】に示した同じ分析枠組みで捉えた *East Asian Transwar Popular Culture: Literature and Film from Taiwan and Korea* (edited by Pei-yin Lin and Su Yun Kim, Singapore: Palgrave Macmillan, 2019) 所収の第5章 “The Production of Imperialized Bodies: Colonial Taiwan’s Film Regulations and Propaganda Films” (pp. 147-178) と同第6章 “The National Anthem Film in the Early 1950s Taiwan” (pp. 179-206) である。同論文集は、台湾と韓国という二つの地域における文学と映画という大衆文化について、植民地期と冷戦期を対象に、比較史的な視点で取り組んだものである。本研究の成果として報告者が担当した第5章・第6章は、政治的画期を跨ぐ連続面と不連続面について同じ章のなかで直接に論じているわけではないが、植民地期・冷戦期、台湾・韓国、映画・文学という複合的な比較の文脈のなかに並置されることで、台湾における映画統制がもつ特徴を相対的に浮かび上がらせる構成になっている。

(4) 本報告書「3. 研究の方法」で述べたように、2017年の病気療養を経て調査の一部を断念したことは、本研究の当初計画を大きく損なうことになった。しかしながら、不足を補うために取り入れた人物研究や作品分析、「戒厳令解除の前後」という画期を射程に加えたことにより、新たな展望が開けた側面もある。すなわち、政府主導の映画統制では捉えきれない人々の生命や生活に根ざした「経験としての映画」への着眼である。本研究の総括となる2019年度の国際ワークショップ「政治的画期を跨ぐ台湾人文史」では、本研究の課題を推進するなかで得た知見をもとに、「1945年/1949年」「中国大陸/台湾」を時間的空間的に跨いだ映画人と映画作品、すなわち何非光(1913-1997年)と白克(1914-1964年)、映画作品『一江春水向東流』の中国大陸版(1947年、蔡楚生・鄭君里監督)とその数年後に製作された台湾版(1965年、張英監督)が、それぞれ時間的空間的な境界を交差する鏡像のような関係にあるのではないか、という仮説を提示した。同様の着眼から、植民地期台湾における日本人の映画活動を「戦後」台湾映画史に接続するものとして整理した口頭報告(2019年11月13日、早稲田大学演劇博物館国際シンポジウム)や、「1945年/1949年」「中国大陸/台湾」を時間的空間的に跨いで戒厳時期に活躍した映画人(呂訴上、何基明、白克)に関するエッセイ(「戒厳時期の台湾映画人①～③」『台湾協会報』2019年5月号～7月号)を試論的に公表した。

今後の課題は、「1945年/1949年」「中国大陸/台湾」を跨ぐ人々の生命や生活に根ざした「経験としての映画」について研究を進めることで、「官」主導の映画統制を「民」の側から検討することである。また、「官」主導の映画統制についても、本研究の途中で一部調査を断念したことにより、なお不明な点が多く残されている。引き続き調査を行っていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 三澤真美恵（翻訳：蓋暁星）	4. 巻 2巻9号
2. 論文標題 戦後臺灣電影院「播放國歌影片」之確立過程	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 CJEAS當代日本與東亞研究 ( <a href="http://jeast.ioc.u-tokyo.ac.jp">http://jeast.ioc.u-tokyo.ac.jp</a> )	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三澤真美恵	4. 巻 18
2. 論文標題 戦後台湾の映画館における国歌フィルム上映プログラムの確立	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本台湾学会報	6. 最初と最後の頁 63-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 MISAWA Mamie (traduit par A. Nanta et L.Nespoulous)	4. 巻 53
2. 論文標題 Film Reception in Taiwan under Japanese Rule, or “Assimilation by Confrontation”	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Ebisu	6. 最初と最後の頁 203-235
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三澤真美恵	4. 巻 38
2. 論文標題 国立台湾歴史博物館所蔵「植民地期台湾映画フィルム史料」の特徴	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 メディア史研究	6. 最初と最後の頁 21 - 46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Manie Misawa
2. 発表標題 Rethinking Colonial Taiwan's Film Regulations: Using the Discovered Film Materials as Examples
3. 学会等名 Taiwan Cinema: A New Historiography
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 三澤真美恵
2. 発表標題 台湾転型正義和記録片叙述 以兩部有關「慰安婦」影片為例
3. 学会等名 「影像記録與兩岸社会」工作坊
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 三澤真美恵
2. 発表標題 1950年代前半台湾の映画館における「国歌斉唱」プログラムの確立
3. 学会等名 日本台湾学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 三澤真美恵
2. 発表標題 植民地期台湾における日本人の映画活動
3. 学会等名 早稲田大学演劇博物館国際シンポジウム『日本演劇・映画人の 台湾時代 植民地舞台にみる文化的交錯 』
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mamie Misawa
2. 発表標題 Debate over “ comfort women ” and public memories in Taiwan
3. 学会等名 Seminaire de Institut d’Asie Orientale, CNRS
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Mamie Misawa
2. 発表標題 "Visualizing the Process of Becoming Japanese: Colonial Taiwanese Film Civilian Dojo”, “ Sinicizing Taiwanese through Singing: Ritual Program of the ROC ’s National Anthem Film”
3. 学会等名 International workshop: Nation, Gender, and Genres: Literature and Film from Taiwan and Korea, 1930s ~1960s
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 三澤真美恵
2. 発表標題 台湾ドキュメンタリーと移行期正義
3. 学会等名 国際シンポジウム「ドキュメンタリーに見る現代台湾の光と影」（山形国際ドキュメンタリー映画祭）
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 Pei-yin Lin, Su Yun Kim, Kelly Y. Jeong, Lisa Yoneyama, and Mamie Misawa	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 304
3. 書名 East Asian Transwar Popular Culture: Literature and Film from Taiwan and Korea	

1. 著者名 Noriko Sudo, Takeshi Tanikawa, Atsuko Kato, Yanli Han, Tomoya Kimura, Benjamin Joinau, Youngjae Yi, and Mamie Misawa	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Kyoto University Press and Trans Pacific Press	5. 総ページ数 237
3. 書名 Cultural Politics around East Asian Cinemas 1939-2018	

1. 著者名 李道明主編, 三澤真美惠, 羅[上下], 葉月瑜, 史惟, 賴品蓉, 王萬睿, Aaron Gerow, 裴卿允, 孫日伊, 四方田犬彦, 李英載, 劉文兵, 陳[火章]智, 康ジエ, 張泉	4. 発行年 2019年
2. 出版社 台北芸術大学、遠流出版	5. 総ページ数 576
3. 書名 動態影像的足跡 - - 早期臺灣與東亞電影史	

1. 著者名 三澤真美恵 編・国立台湾歴史博物館 出版協力	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 300
3. 書名 植民地期台湾の映画ー発見されたプロパガンダ・フィルムの研究	

1. 著者名 王君琦 主編、三澤真美恵ほか20名著	4. 発行年 2017年
2. 出版社 聯經・財團法人國家電影中心	5. 総ページ数 504
3. 書名 百變千幻不思議：台語片的混血與轉化	



1. 著者名 若林正文・家永真幸編、三澤真美恵ほか計27名著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 360
3. 書名 台湾研究入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>三澤研究室HP http://misawa.pbworks.com</p> <p>インタビュー 湯湘竹監督「最良の部分は永遠にレンズの外側にある」『中国語中国文化』第16号（2019年3月25日）128-145頁。 楊家雲監督「アマが生きた真実の記録を残す」『中国語中国文化』第16号（2019年3月25日）146 - 162頁 呉秀菁監督「他者の生命をテキストにする責任」『中国語中国文化』第16号（2019年3月25日）163 - 181頁</p> <p>エッセイ 「戒厳時期台湾の映画人 呂訴上」『台湾協会報』2019年5月15日、2頁 「戒厳時期台湾の映画人 何基明」『台湾協会報』2019年6月15日、2頁&amp;#160; 「戒厳時期台湾の映画人 白克」『台湾協会報』2019年7月15日、2頁</p>
---

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----